

私の一文字「為」

副代表幹事
木川 眞

ヤマトホールディングス
取締役会長



「為さざるの罪」を念頭に経営

会員の方が思いを込めて選んだ一字に、書家の岡西佑奈さんが命を吹き込む「私の一文字」。第8回にご登場いただいたのは、木川眞副代表幹事です。

木川 今回私は、座右の銘「為さざるの罪」から「為」を選びました。これは富士銀行（現みずほFG）に入社した1年目に先輩から教わった言葉で、「自分で真剣に考え、こうだと思ったら思い切って行動すべきだ。失敗を恐れて何もしないことは、果敢にチャレンジして失敗することよりずっと大きな罪なんだ」と話してくれました。良い言葉だと大いに気に入り、以来、座右の銘として実践してきました。

岡西 今回は旧字で書かせていただきましたが、「為」は漢字の上の部分は象の爪や手を表し、下が象の体を表す会意文字です。象は昔、宮殿などの大規模な土木工事に使われていたこともあって、「人のためになす、行動する」といった意味を持つようになったと言われていました。左払いを一番強く書かせていただきました。

木川 それにはどんな意味があるのですか。

岡西 日本は縦書きの文化ですから、文字の右を過去、左を未来と考えます。そこで、未来に向かって行動していく木川さんの思いを左払いに乗せました。四つ足の部分は、象だとゆっくり歩くものですが、ここでは馬のように駆け抜けていく素早さを表現しました。

さまざまなご経験をなさってこられた木川さんの一番の「為さざるの罪」のエピソードとは何ですか。

木川 2011年の3月11日に起こった東日本大震災のときに

決断した「宅急便1個につき10円の寄付」です。寄付総額は約142億8,448万円になりました。決断したのが3月末。ヤマトを支えてくださった地域への恩返しという気持ちが強くありました。

岡西 震災後、そんなにすぐですか。

木川 ちょうど4月1日からヤマト運輸からヤマトホールディングスの社長になることが決まっていたこともあって、就任挨拶にこの施策を入れようと思ったんです。当時、あの地域に約1万人もの社員がいました。彼らも皆、被災者です。それにもかかわらず、自発的に救援物資の配送などの救援活動を始めていました。彼らは会社がこれまでずっと大事にしてきた「ヤマトは我なり」という理念を身をもって見せてくれたのです。後に岩手の責任者から、混乱する中で頭によぎった言葉が社長だった私が繰り返し言ってきた「為さざるの罪」だったと聞きました。社員たちがそこまでやったのなら、会社としても最大限のことを行おうと決断したんです。

岡西 まさに為さざるの罪の実践ですね。

木川 やって良かったです。社員のモチベーションがとてもし上がりました。会社としても「サービスが先、利益は後」といった企業理念をきちんと社員に見せることができました。やらなかったら悔いが残ったでしょうね。

岡西 では、経済同友会では「為さざるの罪」の実践をどう考えていらっしゃるのですか。

木川 経済同友会の取り組みの一環として、中高生などに講演をしています。主義主張の押し売りですが、「失敗は若さの特権。失敗を恐れて挑戦しないことが罪なんだよ」と話します。最近の若者は叱られることに非常に抵抗感がありますが、若いうちは挫折した分だけ、人間としては成長すると伝えたいですね。

書家
岡西 佑奈

1985年3月生まれ。23歳で書家として活動を始め、国内外受賞歴多数。

